

基地の痛み

駐留の記憶

続く沖縄の負担

「おびたしいジェット戦闘機が轟音を立てて出撃し、戦場そのものだった。その苦しみが今も沖縄で続いていると思うと、胸が痛い」

鳩山政権がシユワフ陸上案を検討していると報じられた2月中旬、大阪府豊中市の元府議、浅野弘樹さん(82)は大阪(伊丹)空港を見渡せる公園で、思いを明かした。

伊丹空港はかつて「伊丹エアベース」と呼ばれる米軍基地だった。敗戦直後、旧日本軍の大坂第2飛行場を米軍が接收した。50年6月に朝鮮戦争が起きると、海兵隊が配備された。豊中市には米兵専用

のキャバレーがひしめく「テキサス通り」が出現した。52年6月、大阪大学の4年生だった浅野さんは豊中市の阪大グラウンドで開かれた反基地集会で議長を務めた。

「我が町が人殺しに加担していることが耐え難かった」

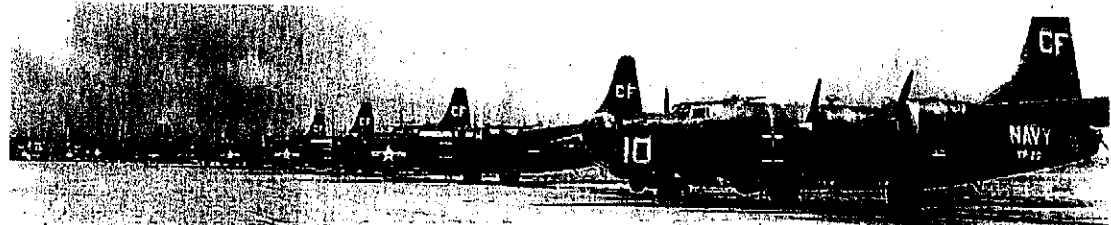
昼夜の区別ない騒音は「ジェット台風」と呼ばれた。豊中、池田、兵庫伊丹の3市は米軍の空港拡張計画に反対する期成同盟を結成。58年3月、米軍は基地を日本政府に全面返還し、「大阪国際空港」と改称された。

サンフランシスコ講和条約が発効した52年ごろから、本土各地で反基地運動が広がった。この時期、本土の米軍基地は4分の1に縮小されたが、米統治下の沖縄では、本土の部隊移設などにより、基地面積は2倍に広がった。

務原市。朝鮮戦争末期の53年に米海兵隊が移駐し、住民らの反対運動が強まった。海兵隊は58年に撤退したが、移設先はキャンブ・シユワフだった。

運動のリーダー格だった元社会党衆議院議員の渡辺嘉蔵さん(84)は「規律正しい米兵もいたが、女性が夜1人で歩けない雰囲気があった」と振り返る。渡辺さんは96年2月、前年に起きた米兵少女暴行事件を受け、橋本龍太郎首相(当時)が菅大間など沖縄の米軍基地の整理・統合・縮小を求めた日米首脳会談に、官房副長官として出席した。

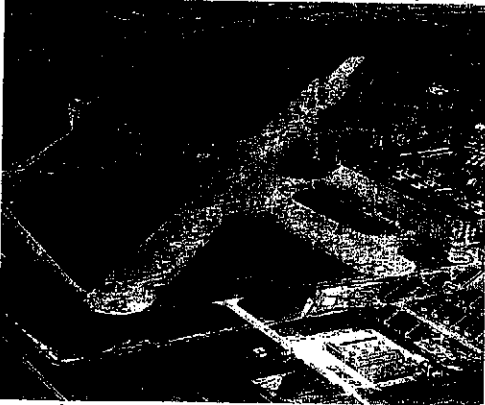
「あれから14年もたつが何も変わっていない。これ以上、沖縄に負担を強いることはできない。国外が無理ならば本土移設も考えないと」



豊中・岐阜の住民

社民、国民新両党が8日、米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)の移設案を示した。鳩山政権内でキャンブ・シユワフ陸上部(同県名護市)への「県内移設」案も浮上する中、在日米軍基地の負担に苦しむ沖縄を複雑な思いで見つめる人たちがいる。本土に多くの米軍基地があった1950年代、反基地運動に取り組み、撤去が実現した自治体の住民らだ。

▶▶1面参照



●1951年、米軍伊丹基地に並ぶ軍用機駐留米兵撮影、元伊丹市職員・荒西完治さん提供
 ①同基地。拡張計画が実現しないまま返還が発表された
 ②1957年9月③同基地入り口にあった門
 ④荒西さん提供

当時、労組などでつくる大阪軍事基地反対連絡懇談会の事務局メンバーだった佐藤公次さん(84)は兵庫県芦屋市に後年、伊丹にいた兵士の一部が沖縄に移ったと知り、複雑な思いになったという。

かつて米軍基地「キャンブ岐阜」があった岐阜県各

在日米軍に詳しい琉球大学の我部政明教授(国際政治学)は「米国が50年代に日本本土の基地を縮小し、沖縄の基地を強化したのは、米軍の極東での戦略変更と深いかわりがある。ただ、結果的に本土で基地の存在が見えにくくなったことで安保条約への抵抗感が薄れ、基地問題は沖縄など局地的な問題と扱われる端緒となった」と指摘する。

(山田理恵、武田肇)